

# 週刊女性 5月22日号に

## 弊社社長とパンの缶詰が紹介されました！

東日本の被災地に「パンの缶詰」20万個!  
この愛はふんわりおいしい

震災発生直後からパンの缶詰の在庫を放出。避難所や仮設住宅に届け続けている

秋元義彦さん（パン・アキモト）代表

本当にそんなにおいしいのだろうか？そこで、「おいしく備蓄食」シリーズのオレンジ味（370円）を食べてみることに。缶を開けると同時に、パンの甘みとオレンジの甘さが混じり合った芳醇な香りが鼻に飛び込んできて食欲をそそる。これは期待できそうだ。

パンの外側を覆っている紙をはがすと、中からボリューム感のあるパンが出てきた。ひと口食べてみて驚いた。たしかに、従来の保存食にありがちだった乾燥してボソボソと食べにくい、のどに詰まるような食感とは全然違う。しつとりとした、そして、ふわふわとした食感だ。

小さく刻んで一面にちりばめられているオレンジのシロップ漬けが味のアクセントになり、のどごしをいつそうなめらかにしている。パンの味にこだわりを持つ人は多いけれども、これは、そうした人々をも十分に満足させられる味だろう。

しかし、パンの缶詰が日本国内はもとより世界各国で注目されるのは、そのおいしさや作り手の優しさだけが理由ではない。それが現在のような、世界に注目される企業へと変貌する最初のキッカケとなつたのが、1995年の阪神淡路大震災だった。

クリスチャンだった父・健二さんと関係の深い神戸の教会に対し、秋元さんは、パンを送つて支援しようとした。

「焼きたての食パンやバター

食べると思わず涙があふれてくる。そんなパンの缶詰がある。おいしいから？ たしかにおいしい。でも、それだけではない。作り手の強い愛情や優しさがストレートに伝わってきて、生きる勇気や明日への希望がわいてくる。

2011年春、東日本大震災の被災地。遠慮深い東北の人々は、支援物資が届けられても、辞退しようとする人も多かった。そのパンの缶詰を持つてきただけは切々と訴える。「どうかお手伝いをさせてく

ださい。とりあえず今回は受け取ってくれませんか？」そして、もし関東に震災がきたら助けてください」と。

ようやく受け取り、パンを取り出し食べ始めた女性の目から、見る見る大粒の涙があふれ出し、彼女はやがて号泣してしまう。別の女性は、彼の後ろ姿に対し、神仏を拌むようになつぱりとした氣性で、彼は恐縮しきつた表情で「たたた1個のパンで拌まるなんて……」

このパンの缶詰を開けると、ショートブレッド風の香りがする秋元義彦さん。58歳。ヨーミングな58歳。ラリとした長身、竹を割ったようななさつぱりとした気性でユーモアにあふれ、笑顔がチヤーミングな58歳。

「たたた1個のパンで拌まるなんて……」

このパンの缶詰を配つていた男性は、栃木県那須塩原市で『パン・アキモト』を経営する秋元義彦さん。

「うえないおいしさと優しさを届け続ける秋元さんは、スマートな人間で、とても優しく受け取り、パンを自分で作る女性の目を見たときに、心からおおいに感動しましたが、今でも、あのうつくりと柔らかいパンを思ふと涙があふれてきます。助けていただいて本当にありがとうございました」

保存食という、カンパンに代表される最低限の栄養補給だけを目的とした味気ないものをイメージしがち。

しかし、秋元さんは言う。「私たちにはそういう非常時であつても、いや、そういう絶望的になりやすい、つらい時だからこそ、心からおいしいと思えるパンを食べていただきたいと思っています」

震災で家も流されすべてを失いました。その後、救援物資でストロベリー味のとてもおいしいパンの缶詰をいたしましたが、今でも、あのふつくらと柔らかいパンを思い出すると涙があふれてきます。助けていただいて本当にありがとうございました」

保存食という、カンパンに代表される最低限の栄養補給だけを目的とした味気ないものをイメージしがち。

しかし、秋元さんは言う。「私たちにはそういう非常時であつても、いや、そういう絶望的になりやすい、つらい時だからこそ、心からおいしいと思えるパンを食べていただきたいと思っています」

題字：永六輔

人気キャラクター

秋元さんの支援活動は、東日本大震災だけではない。ジンバブエ飢餓、新潟県中越地震、スマトラ島沖地震、台湾台風豪雨、フィリピン・ミンドロ島大洪水、ハイチ大地震など、世界各国の被災地に駆けつけた。現地の人々に、おいしさと優しさに満ちたパンの缶詰を提供し、感動と勇気を与えていた。

町長を含む多くの犠牲者を出した岩手県大槌町の40代女性は言う。

「震災で家も流されすべてを失いました。その後、救援物資でストロベリー味のとてもおいしいパンの缶詰をいたしましたが、今でも、あのふつくらと柔らかいパンを思い出すると涙があふれてきます。助けていただいて本当にありがとうございました」

保存食という、カンパンに代表される最低限の栄養補給だけを目的とした味気ないものをイメージしがち。

しかし、秋元さんは言う。「私たちにはそういう非常時であつても、いや、そういう絶望的になりやすい、つらい時だからこそ、心からおいしいと思えるパンを食べていただきたいと思っています」

55 週刊女性

54 週刊女性





トトロ・キュメン

に、企  
に缶詰  
取つて  
れを東  
イルも  
ようす  
的によ

ノを作り、堤防の築  
したいと思いまし  
使命感を口にする。

詰がスペースシャトル「エンデバー」に採用されるなど、米国での秋元さんへの評価は高い。

そこで、近い将来、信彦さんと輝彦さんが中心になつてアキモトUSAを設立し、米国でも救缶鳥プロジェクトを立ち上げるという構想だ。

秋元さん自身は、NPO法

人々を救う活動は、ますます広がつていきそうだ。

工場スタッフと。フル稼働するも注文が殺到し、今は「3か月待ち」の状態

ンの缶詰ではあるのですが、残り4割の柱であるホテル・旅館への納入が落ち込んだのは打撃でした」  
苦境に立つたパン・アキモトに、やがて転機が訪れる。  
4月12日に、テレビ東京のドキュメンタリー番組『ガイアの夜明け』で、震災発生以降の同社の活動状況が詳しく放送され、それが大きな反響を巻き起こした。

人々から、かなりの額  
金が送られてきたのだ  
せつかく義援金を送  
被災者の手元にほとん  
ていなことが問題に  
いた時期だつただけに  
ン・アキモトにお金を  
えすれば、パンにして  
届けてもらえる、だつ  
金を送ろう"と思つて  
人々も多かつた。  
送金だけではない。  
ざ那須塩原まで訪ね  
人々が多く、しかも、  
名を名乗ることもなく  
を渡し、去つていった  
「年金生活を送るご老

ても届いて  
“パ  
りさ  
実に  
らお  
れた  
れた  
ぎわ  
来る  
して  
援金

人たのれこさ復讐はんじを等直にじかる。結

局、事務局、事務室の各  
部屋に配つておる。

北の被災地に対する支援は、  
詰による支援は、  
分、企業・NGO  
間接的に配った分  
美に20万缶弱に及

今と興へての一睡研修信彦ち來り

## 「仮設住宅」から来た新入社員

男2女、それぞれ今や社会人。長男の信彦さん（32）はパン・アキモト営業課長として全国を飛び回っている。次男・輝彦さんは那須塩原工場の製造課長であり、午前2時に出社して、製造ラインで連日、陣頭指揮を執っている。ともに次代のパン・アキモトを担う後継者への道を歩んでいるが、大学を出て就職していたこともあり、秋元さんご夫妻はあえて実家の跡を継げとは言わなかつた。

「自分たちがしてきた苦労を子どもたちにはさせたくないありませんからね。だから、『帰ろうかな』って言つてくれた時も、『無理しなくていいのよ』って言つたんですけど」と、志津子さんは言う。

ハゲの原因を作つたと秋元さんが爆笑する長女の愛実さんも、今では立派なママだ。2人の子どもを連れて毎月里

次女のぞみさん（25）は北海道の大学を卒業後、NTTの関連会社に就職し、営業で飛び回る毎日を送っている。たほか、機械のバランスが変わり、さらには停電して、工場は操業不能となつた。

しかし、秋元さんに迷いはないなかつた。那須塩原工場の在庫15000缶を東北支援に投入することを即決。

「震災直後は時間との勝負ですが、現地の道路事情や被害状況などは不明でした。そんな中で、とにもかくにも自衛隊なら輸送可能だということがわかり、13日には陸上自衛隊練馬駐屯地に、取り急ぎ7200缶を車で運びヘリで輸送してもらいました。

それが東北の被災地支援のスタートで、以降、毎週、私

は車で空き、旧知もらつて布して回私たちに備蓄しに急ぎよケースも弊社工は、東北生産を再計画停電で、それしたね。と、パンしまいます。在庫1私財をなことで理その後は、營利がだけで「そのと

城県など各地に赴  
いた企業が支援用  
量放出してくれた  
りました。  
物が復旧してから  
援を中心に据えて  
しました。  
地区は、いわゆる  
対象地域だったの  
の対応は苦労しま  
造途中で停電する  
全部ダメになつて  
から……」  
000缶放出は、  
うつ“義援”といふ  
できるけれども、  
業として、寄付行  
やつてゆけない。  
りです。私はせめ  
ました。

て原材料費だけでも出しても  
らえるならば、支援活動を継  
続しようと決意していまし  
た。すると、それを知った仲  
間たちが資金集めの呼びかけ  
をしてくれました。それで当  
面は、利益ゼロで、原価だけ  
を回収する形で生産を続ける  
ことになったのです。

しかし、そうした生産活動  
には、やはり無理があり、ジ  
ワジワと経営を圧迫していく  
たのは事実です」

常務取締役で経理と受発注  
を担当する志津子さんも言う。  
「もうひとつ決定的だったの  
は、『風評被害』です。ここ  
那須塩原は、福島第一原発の  
100キロ圏外なのに、那須  
高原や塩原温泉などにいらづ  
しやるお客様が激減しまし  
た。そのため、そここのホテル  
・旅館からのパンの発注が、  
通常時の半分以下になつてしま  
つたのです。



社内には被災地から届いたメッセージなどが貼られている



次世代を担う、長男の信彦さん。  
京でのサラリーマン経験も 東



頂塩原にある本社工場売店。もちろん普通のパンも売られています。

59 週刊女性

**撮影・文/嶋田淑之**  
**取材/親川周平**